

県産食材 発信いかに

盛岡でアグリフードヒルズ協会



地元食材の魅力や情報発信の課題について語る生産者ら

生産者らと討論会

地産地消の普及などに取り組む一般社団法人アグリフードヒルズ協会（重石桂司理事長）は22日、盛岡市盛岡駅西通の「マリオス」で、県産食材のブランド化に関する討論会を開いた。同協会は同市に産直施設や農家民宿の案内窓口などを設置する計画を立てており、県内生産者らと首都圏への情報発信策を採った。

今秋、農業会社設立へ

生産者や行政関係者約70人が出席。農家や海産物加工業者、食関連の情報を分析する日本フードアナリスト協会（東京都千代田区）の横井裕之理事長と同協会認定のフードアナリストがパネリストとなり、生産や販売の課題を話し合った。八幡平市の合同会社「お日さま農園」の赤坂栄専務は「全国と同じものを栽培するだけでなく、岩手ならではの野菜や短角牛の生産に取り組むべき」と提言。花巻市の盛川農場の盛川周祐代表は「地元で肉を生産しても飼料が輸入物では国産と言えないのではないか。岩手は穀物生産に適しており、飼料のトウモロコシの

自給を始めた」と語った。フォーラムでは、県外在住のフードアナリスト5人を「北東北食文化大使」に任命。横井理事長は「今後はフードアナリスト100人を大使に任命し、北東北の食材をSNSやブログで発信していく」と語った。重石理事長ら関係者は県内の農家や食品加工業者と協力し、今年秋ごろの農業会社設立を目指している。6次産業化を支援する官民ファンドからの出資を想定し、盛岡市内に産直施設や大型冷蔵倉庫、障害者らが作業する漬物加工場などの